
ネギま！を歩く～双子の兄でもネギじゃない～

十六夜哀音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！を歩く〜双子の兄でもネギじゃない〜

【Nコード】

N5739Z

【作者名】

十六夜哀音

【あらすじ】

ヲタクな俺は『ネギま！』好き。

死んだ記憶も無いのに、目が覚めたら赤ん坊！？

もう一人赤ん坊がいるみたいだけど・・・え？ネギ・スプリングフイールド？

どうやら俺はネギの双子の兄に『転生』してしまったようだ。

何故兄なのにネギじゃないっ！！

肯定的で否定的！？似非敬語で素を隠しながら生活する矛盾を孕んだ主人公を送る

『魔法先生ネギま!』の世界へようこそ・・・

この物語は残酷な表現・アンチ?・ガールズラブ?等が含まれる
場合(可能性)がありますのでご注意ください。

尚、更新は不定期です。

1 歩目くイギリス・とある山奥の村・ウェールズ・メルディアナ魔法学校を歩

目の前に広がるのは闇夜を染める紅蓮の炎と灰色の塊が多数。辺りを炎に包んだ元凶は既に目の前にいる男に殲滅された。

地に倒れて足を失っているが出血はなく、その失った部分が灰色に染まった女の前に俺ともう1人の子供が守るように立ちはだかる。俺と子供の目の前には元凶を殲滅した男がローブを身にまとい、大きな杖を持って立っていた。

その男は俺たちの方へと動き出す。

「お前達・・・そうかお前達が・・・お姉ちゃんを守っているつもりか？」

もう1人の子供・・・弟は初心者用の杖を掲げるも、近づく男に恐怖して肩を震わせて目を瞑る。

俺はそんな弟の前に立ち、両手を広げた。

そう知っていれば怖くない。男の手がこちらに伸びても怖がることもない、その手は俺と弟の頭の上に乗せられる手なのだから。

「大きくなつたな・・・お、そうだお前達に・・・この杖をやろう。俺の形見だ・・・一本しかねえけどな・・・」

そう言つて、頭を撫でた男は俺にその杖を手渡すが、それを受け取つた俺はすぐに弟へと杖を手渡した。

「お父さん・・・？」
そんな男の姿に弟は眩くが、俺から手渡された杖が重かつたのだからバランスを崩す。

「もう時間が無い・・・ネカネは大丈夫だ、石化は止めておいた。後はゆっくり治してもらえ。悪いな、お前達には何もしてやれなくて・・・」

男はそう言いながら空に浮かぶ。

「・・・お父さん？」

「こんなこと言えた義理じゃねえが・・・元気に育て、幸せにな！」

！」
彼は何を想って此処に来たのか、どんな想いで此処から去らなくてはいけないのか俺にはまだわからない。
そして飛び去る男の背中を「お父さん！！」と叫び続けながら地を走る弟の背を俺はこの目に焼き付けた。

「卒業証書授与・・・この七年間よくがんばってきた！だが、これからの修行が本番だ。気を抜くではないぞ・・・ネギ・スプリングフィールド君！」
「ハイ！」

ここはメルディアナ魔法学校。今俺の目の前では卒業式が行われている。
今名前を呼ばれたのは俺の弟であるネギ・スプリングフィールドである。

そして、彼を弟と呼べる俺はアルク・スプリングフィールド。つまりはネギの双子の兄である。

何故双子の兄なのに、ネギの名前が俺の名前になっていないのかわからないが、推察するに俺が転生者であることが原因ではないかと考えている。

俺は自称『転生者』である。何故自称かとはわかれれば、テンプレートのように神様の失敗で死んだ好きな世界に転生させてあげる上に君の欲しい理解不能能力をプレゼントしよう！などといった記憶が一切ないのである。

要するに、現実^{前世}で眠りに落ちて目を覚ませば魔法先生ネギま！の世界へと紛れ込んでしまっていたのである。
紛れ込んだといっても、主人公の兄として生まれてしまったのだが・

『現実』の記憶を持っているが、『物語』の中に存在する身体であ

るアルク・スプリングフィールドが寝ても覚めても、ネギが主役の^作世界に居続ける、夢から覚めない^{現実に戻らない}のであれば自身を『転生者』と表現してもおかしくはないであろう。さて、よくあるテンプレ的なワンシーンの記憶が無いことから俺自身に『理解不能能力』はほぼ無いのではないかと考えているが、ネギの双子の兄であることから彼の『千の呪文の魔法使い』と『災厄の魔女』の子であるとも言え、魔力総量は弟と同程度の可能性がある。

更にはこの七年間で、弟と禁書庫に籠ることによって『雷の暴風』のような中級魔法いくつかをなんとか使えるようになってしまった辺り、弟と同程度の頭脳^{才能}や開発力を持つていると考えられる。

そのせいだと思うが『現実』の頃とくらべるとかなり物覚えがよかつたりもする。因みにいくつかの上級魔法も使えはしませんが覚えてはいる。

これらの事から、俺が持つであろう『理解不能能力』を強いて上げるのであれば『物語』の知識とネギと同程度の『才能』ではないかと考えている。

因みに『現実』ではそんなに料理をしなかったのに、この歳でかなり美味しい料理が作れるし、家事等もなんなくこなせる。ナイフ投擲[・]ある程度の体術が使えるようになっていたりもした。

これらは『理解不能能力』の一端の可能性もあるが、それは定かではない。

どこことなくそんな人物を『現実』の別の物語^{作品}で見たことがあるような気もするのだが……

そんなことを考えていると不意に名前を呼ばれていることに気づく。

「……ク君！……アルク君！アルク・スプリングフィールド君

！

「……ハイ？」

「全く、君はまた考え事をしていたのかね？卒業式だというのに変わらないのう……」

その言葉にふと、周囲を見ると隣にいるアーニヤは溜息を吐き、ネギはあわあわと慌てた表情でこちらを見ていた。どうやら校長に何度も名前を呼ばれていたらしい。

考え事をしているとどうにも周囲の音が脳に入ってこなくなってしまうのは悪い癖である。

卒業式という長いようで短い時間にそんなことなど考えなければいいのではあるが……

ようやく俺は校長の前に立ち、差し出された卒業証書を受け取った。そして、俺達の卒業式は終わりを迎えた。

ネギ・アーニヤと共に廊下へ出るとネカネ姉さんが待っていた。

卒業証書に浮かび上がる修行の地の確認であろう。

アーニヤはロンドンで占い師、ネギは日本で先生をすることであろう。

恐らくは俺も『英雄の息子』という名のネームバリューを持っていることから日本で先生をすることが修行内容として卒業証書に浮かび上がるであろう。

「ネギ、アルク2人共何てかいてあった？私はロンドンで占い師よ」案の定アーニヤはロンドンで占い師であった。

「今浮かび上がるところ……お？」

ネギがアーニヤに答えると、卒業証書に文字が浮かび上がっているところだった。

俺も卒業証書を見ると文字が浮かび上がってくる。

『A T E A C H E R I N J A P A N (日本で先生をすること)』

それと同時にネカネさんとアーニヤ2人の「ええ~~~~~」
「~~~~~!？」絶叫が廊下に響き渡る。

そして丁度前にいた校長に直訴を始めるネカネさんとアーニヤ

「何かのマチガイではないのですか？10歳で先生など無理です」

「そうよネギったらただでさえチビでボケで……」

確かにどう足掻いても年齢的にアウトだが、修行は修行だし麻帆良

ならなんとかなるだろうとか何とかなつてしまふと思いつつ

「ああ、ネギも日本で先生をすることだったんだ。私も日本で先生をするのが修行内容みたいだ・・・もしかしたら一緒の場所で修行するのもかもしれないね」

と俺が発言するとネカネさんとアーニヤが若干だが大人しくなった。前述にもある通り、俺は覚えもないのに何故か家事全般ができるので若干安心したのだろう。

まあ中身が『一子供におじさんと呼ばれる年齢《ハタチ過ぎ》』 + の年齢なのだからできないこともない。

ただし年齢相応の身長・身体能力なので、稀にできないこともあるが。例えば、身長が足りなくて洗濯物が干せなかつたりすることとかだ。

魔法を使えば出来ることではあるだろうが、修行先では魔法を秘匿して生活しなくてはならないので自身の身体のみで臨む必要性があるだろう。

そんなこともあるがある程度は家事ができるし歳の割に落ち着いているので、ネカネさんやアーニヤからは特に心配されることもない。実際は、あまりにも落ち着きすぎていて心配されているかもしれないが、肉体年齢に精神が引つ張られているかのごとく稀にわがままを言ってしまうこともあった。

しかしながら、落ち着いているとは言えども肉体年齢は9歳であることには変わりはないので尚も校長に無理だと主張を続ける2人が居た。

「卒業証書にそうかいてあるのなら決まったことじゃ。『立派な魔法使い』になるためにはがんばって修行してくるしかないのう」

ネカネさんとアーニヤの直訴も虚しく、校長からその言葉が出るとネカネさんが立ちくらみを起こして倒れてしまった。そして

「安心せい、修行先の学園長はワシの友人じゃからの。ま、がんばりなさい」

と言っ言葉が続いた。

その言葉に元気に「ハイ！わかりました！」返事をするネギと啞然として立っているだけのアーニヤ、そして倒れたネカネさん。そんな光景が俺の目の前に広がっていた。

ネカネさんも大変だなあ・・・等と思いつつもネカネさんを介抱する俺であった。

そして卒業から数ヶ月間ネギと共に日本へ行くための準備、日本語の勉強をしていた。

今は『転生者』である俺が日本語をネギに教える立場ではあるが、実は魔法学校での成績はネギの方が上である。

と言うのも、座学の成績は兄弟ともにトントンなのであるが、実技の成績は俺がネギの得意とする属性光・風・雷の魔法を使っていたため、ネギが主席で俺が次席という扱いになっている。

俺の得意属性は闇・氷・水とネギとは正反対でエヴァンジェリンとほぼ一緒の得意属性なのであるが、わざと成績を下げるためにネギの得意属性の魔法を用いてテストに臨んでいた。

これは今後の布石である。

俺は『転生者』であり、本来ならば『物語』には存在しない。

しかしながら、『物語』に『転生者』がいるのであれば何らかの副作用と修正力が働く可能性が考えられる。

そこで、弟の成績優秀さを俺より上に置くことでMM双等元老院や学園めいじいひ長の目をネギに注目させることにしたのである。

ある種の生贄ではあるが『物語』とほぼ変わらないようにする為なのだから許せ・・・ネギ・・・と思っ手駒ていたりもする。

が、結局主席・次席なので優秀な英雄の息子達として目をつけられているかもしれないが・・・

因みに兄弟仲は良好である。

ネギの千の呪文父の魔法使いに対する思い入れは確かに歪んでいるよ

うに思えるが、年齢や環境から考察すると致し方ないものであると捉えることができる。

幼き頃から両親が目に見える範囲でおらずに伯（叔）父・伯（叔）母に預けられて生活していれば尚のこと、離れで子供二人で暮らしているということもかなり影響しているだろう。

そして母代わりに従姉のネカネさんがついていてくれたが、父に代わって叱ってくれる男の人がいなかった上に、村の人たちがネギに父の面影を見て叱らなかつたことも影響しているであろう。

総じて、幼年期の子の精神を形成するのは周囲の環境であり、大人たちの態度であることからネギの歪みはネギだけの責任ではないと言える。

あまりの歪みっぷりに嫌悪感を抱く人間もいるかもしれないが、年齢や環境を考慮すれば自ずと受け入れることはできるのではないだろうか？

等とは言ってみるが、特に気にすることがなく会話して父親がどうこうという会話をして『俺』がいるということを確認させてやるだけでもいいのだから。

まあ、要するに親含めて大人が悪いんですよ。いくら愛していても、その思いが子に届いていなければ無意味なんだ。

そんなこんなでネギとは普通に兄弟をしていると思っている。

そういえば、ネギはやけに父にご執心だが母について気にしていないのは何故だろう？

先ほどの考察の如く、ネカネさんが親身になつて面倒を見てくれたからであろうか？

そのあたりは追々考えて行くことにしよう。

それとはまた別の要因として、俺が千の呪文の魔法使いになりたいと公言していることも上げられる。

俺自身は『立派な魔法使い』になりたいと思っていないが、このように公言することで周囲の人間に誤認識させている……つもりである。

これのお陰で、ネギも俺が千父の呪文の魔法使いのような立派な魔法使いになりたいものだと思ってくれているようでやりやすい。そんなわけで、特にコレといった問題も発生せずに兄弟仲良く卒業することが出来たのである。

気がつくと、ネギに出していた日本語の読み書きプリントが終わっていたので、今日の勉強を終えて部屋に戻ることにした。

・・・さて、次は日本での目標を考えよう。

麻帆良到着後のイベントを大きくわけると

- 1 . 学年末テスト
- 2 . 桜通りの吸血鬼
- 3 . 修学旅行
- 4 . 悪魔襲来
- 5 . 学園祭
- 6 . 魔法世界

この6つとなる。

とりわけ原作介入ブレイクをする気は無いが、要所要所、特にエヴァンジェリン一家や大河内さんが関わる部分では積極的に介入するだろう。

俺は大河内さん、茶々丸、エヴァンジェリンがすきなんだよ・・・
ハールムにする気はないけど、好きな人くらい守りたいじゃないか・・・

まあ、俺自身が『転生者』なので、既に『介入』しているのは否めないわけだが・・・

方針は基本ネギ任せで俺の知っている『物語』から離れすぎないようにフォローしていくことする。

好きな人らが巻き込まれるタイプの人なので、もしかしたら俺が主新役の世界になるかもしれない。

その時は、ネギと一緒に俺も成長していけばいいかと考えている。

今想像してもわからないのならば、前を見て先に進めばいいから。

そう結論付けて、俺は明日に備えて眠りに落ちた。

そして翌日、俺とネギはアーニヤとネカネさんに見送られてウエールズをあとにした。
懐かしき極東の地、日本にある麻帆良へと旅立ったのである。

1 歩目 イギリス・とある山奥の村・ウェールズ・メルディアナ魔法学校を歩

初 連 載 開 始

一読戴き、気に入っていただければ幸いです。

感想・アドバイスありましたら是非。

誤字脱字はチェックしている心算になりやすいので教えていただくと嬉しいです。

5000字〜10000字を目安に作成していきたいと思えます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5739z/>

ネギま！を歩く～双子の兄でもネギじゃない～

2011年12月19日02時50分発行